岐阜県における方言研究・記述の歴史

A short survey on studies and descriptions of Gifu-dialects

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1．はじめに

どの県にも，方言を記述・考察した書籍，報告，研究が存在する。我々が方言を研究する際には，そのような先人の記述の恩恵に浴することになるが，通覧できるものは多くなく，特にある県の方言研究を他県から概観しようとしても難しいことが多い。

本考察では，岐阜県の方言に関し，関連する記述および考察を概観し，特に，方言と教育という観点から考察をおこなう。そのために，方言と「標準語」あるいは共通語との関係がそれぞれの時代にどのように捉えられてきたかを各時代の著作物から量り，その時代の教育関係者が方言に関する著作物とどのように関わってきたかを中心に論じていく。

なお，書名ならびに人名について，旧字旧仮名遣いで記されているものはそのまま旧字旧仮名遣いで記した。書名ならびに人名については，考察中でも同様の扱いをしたが，「国語調査会」などは，いちいち旧仮名遣いで「國語調査會」とはせず，「編輯」など明らかに異なる字によって置き換えられている場合も，特に引用する必要がある場合を除き，常用漢字の表記に準じて示した。

2．明治期の岐阜県方言研究・記述

明治以前，岐阜県では，『飛州志』などに方言への意識の萌芽が見られるなど，人々の方言に対する意識は，未確認の明治初期の方言に関する記述を含め，明治初期にも受け継がれてきた。特に，明治30年代には，国語教育で教えるべきことば，すなわち「標準語」の選定が急務となり，県内でもことばへの関心が急激に高まっていった。

明治33年に設立された国語調査会は，標準語制定のために，明治35年に調査方針を出し翌明治36年9月各地方言の調査をおこなった。その成果は，明治38年(1905年)の『音韻調査報告書』ならびに翌明治39年(1906年)の『口語法調査報告書』としてまとめられ，『口語法調査報告書』の付録である『口語法分布図』には，その図版37枚が収録されている。標準語制定の流れについては，ここで多く触れることはせず，この調査が地方の方言記述ならびに方言に対する意識にどのような影響を及ぼしたのかを考えてみたい。

このような調査が，中央政府の指揮の下，直轄でおこなわれたのかと言えばそうではない。まずは各府県に調査項目を送り，それを各地の師範学校や教育会に報告させて，それをまとめ上げたと考えるのが妥当であろう。では，そのもとになった岐阜県内での調査はどのように報告されているだろうか。

・『明治三十五年二月　大野郡方訛言集』(明治35年=1902年)

表紙に「大野郡教育會」とあり，また，例言の後に「大野郡教育会研究所」とあるが，奥付なし。

【概要】　手書きで「あ之部」として，名詞19語，形容詞2語，動詞11語，接頭辞2語が挙げられているように，語頭音によって五十音順に俚言が品詞別に39ページにわたって概算で660語

ほど収録されている。形容詞について「アヲイ」が「黄」と記述されるなど，貴重な記述が見られる。動詞に付加される，反語の「-スカ」や推量の「-ズモ」などは，動詞として，適当な語に付された形で収録されている。

・『養老方言集』（明治35年=1902年）

發行兼著作者　養老郡教育會　岐阜縣養老郡高田町大字高田

印刷所　西濃印刷株式會社　高田支店　岐阜縣養老郡高田町大字高田五百十四番戸

【概要】　阿部から五十音順におよそ600語を活字を組んで収めるこの方言集は，この当時の他の方言集よりも，「矯正」的性質が強く見られる。方言語形は「矯正スヘキ語」とされ，その下には「正語」に加え，「語釋」として語源説や古語が書かれている。「正語」は，半数ほどが空白のままであるが，これに関しては「緒言」に，「未タ之ニ適當スベキ語ヲ得サレハナリ是等ハ後日ノ考ヲ侯テ必ス其闕ヲ補フヘシ」と書かれている。たとえば，当地で「いきやけ」として項目が上がる語は，「語釋」に，「東京ノ俗ハしもやけト云ヘリいきやけハ凍テヤケナルベシ」と見られるが，「しもやけ」は「正語」とはなっていない。標準語が確立していく過渡的な時期であり教育界も模索中であったことが伺われる。

・『東濃方言集』（明治36年=1903年）

奥付はなく，例言の最後に，「明治卅五年十二月　東濃方言調査委員　山川孝　度會吉郎」と記されている。発行はその翌年で，「明治三十六年四月　恵那郡教育會」との表記が見られる。

【概要】　手書きで五十音順に1300語あまりが収録されている。収録語は，音韻変化によるもの，俚言などのほか，適語に付加された接辞などである。編集の経緯についても記されており，「當方言集ハ第二回東濃四郡聯合教育會ノ決議ニ基キ聯合各郡教育調査ノ材料ヲ本會ニ於テ委員ニ付託編纂シタルモノナリ」と書かれている。当時，このような方言集集の機運が，全県的にあったことが推察される。

【付記】　筧五百里(1954:17)には，「東濃方言集成　明治三十五年十二月謄写版　半紙版袋綴（傍点筆者）」とある。内容として記されているものも同じであり，同一のものと考えられる。

・『飛騨國吉城郡方訛言集』（明治36年4月=1903年）

編輯者　岐阜県吉城郡阿會布村麻生野尋常小学校内　荒原松之助

発行者　吉城郡教育会　代表者　長瀬吉郎

印刷所　岐阜縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸　西濃印刷株式会社

緒言は明治34年3月で，附記は明治35年10月の日付がある。

【概要】　手書きで，音韻について246項目，語彙について258語の報告がある。音韻については，母音が変化した語を集めた「同行の轉」，子音が変化した「同列の轉」など，下の目次に示したような項目が挙げられているが，『音韻調査報告書』および『口語法調査報告書』に記載されている調査項目には準拠していない。

分析について，地域の記述，使用場面などが記述されており興味深い点が多い反面，「見える」を「める」というなどを，音韻変化ではなく動詞として挙げるなど甘い点も見られる。

【目次】　第一　訛言之部　其一　同行ノ転（72語）　其二　同列ノ転（59語）
其三　添音（25語）　其四　延音（6語）
其五　省音（23語）　其六　転約（12語）　其七　雑（49語）
第二　方言ノ部　其一　名詞（156語）　其二　代名詞（7語）　其三　動詞（46語）
其四　副詞（17語）　其五　形容詞（10語）　其六　感嘆詞（4語）

第三　古語ノ部（9語）
第四　重複語（9語）

・『飛騨國吉城郡方訛言集　全』（明治36年4月=1903年）
編輯者　岐阜県吉城郡阿會布村麻生野尋常小學校内　荒原松之助
発行者　吉城郡教育会　代表者　長瀬吉郎
印刷所　岐阜縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸　西濃印刷株式會社
【概要】　上記の同名本を活字化したもの。手書き版にはなかった「緒言」「地勢的影響」「歴史的影響」「結論」ならびに付録として「地方俗傳」が付く。
【付記】　この後，手書きの物と本書とは別にタイプライターによる活字本など，何稿かの写しが見られる。

・『岐阜県方言』　松平静著（明治36年5月=1903年）
岐阜縣師範學校
印刷所　岐阜縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸　西濃印刷株式会社
【概要】　巻頭の「凡例」に「本校（=岐阜縣師範學校）の命によりて，三十四年十月より，蒐集に着手せしものなり。」とある。その手法も，「本校生徒につきて，各自に，その郷里の方言をあつめて書き出さしめ，さらに，各郡役所に，蒐集を依頼し，かくて，各郡より，送られたるものをあつめて」と記されていて興味深い。県内のどの地域の方言であるかは，各項目の下部に「用フル地方」として記されている。
　やはり，「教育上矯正すべき方言を蒐集」する目的で編まれたものであるが，標準語に関しては，「適當せざるもの多からむ。見む人正してよ。」とあるように，自信がない様子が見られる。約1600語を収録。

明治35年から36年にかけて，岐阜県内では多くの方言集が刊行されている。これらのいくつかは，手書き版と活字版とが同時に県内図書館に伝わってきている。単に印刷部数が限られていたことによってそっくりに謄写版が作られたとは考えにくい。このころの出版について詳しく知らないため，想像の域を出ない部分もあるが，むしろ，活字版としての仕上がる前に関係各位が入手できるよう便宜を図った可能性も考えられようか。そうであるとするならば，なぜそのような必要があったのであろうか。松平静著『岐阜県方言』は，確かに県内方言の集積としての性質はもっているが，項目としては，上に挙げた語彙集を網羅したものではない。とすれば，より高次に方言収集の機運が高まっていたか，そのような必要性があったと考えざるを得ない。
国語調査会による方言収集とは項目として同一ではないし，時期的にも国語調査会の調査依頼以前から上記の方言集は収集が始まっていることからも，国語調査会の依頼を受けて収集がおこなわれたとは考えにくい。むしろ，標準語制定という社会機運を察知したひとつのムーブメントがあったのではないかと考えるべきであろうか。

このころに著されたであろう，未確認の方言記述について，昭和29年　筧五百里（当時，岐阜大学教授）著『岐阜縣方言書目録』によっていくつか拾い，そのまま引用する。

・飛騨方言の語源的研究　衛茅園主人　高山新聞　明治二十五年頃か，（多賀秋伍郎氏）
・飛騨方言　田中正太郎　人類学雑誌　明治二十五年頃か，（多賀秋伍郎）
・方言訛言調査票　大正元年調査　海津郡高須尋常高等小学校編　写本一冊

多賀秋伍郎氏については，今のところどのような人物であったかはっきりしない。海津郡の『方言訛言調査票』については，次節で挙げる海津郡役所編の調査書類と大いに関係があると考えられるが，確かめられない。また，『北方町史　通史編』(1982:932)「第六節　方言」には，「大正一年（一九一二）に本巣郡小学校長会が集めたもの」の存在が記されているが，管見の限り現存は確認できない。

このように，未確認の資料をもとに語れることは少ないが，明治30年代の記述に至るまでにもいくつかの記述・研究が存在したことは確かであり，国語調査会の調査依頼は，たまたま期が重なったに過ぎず，そのころ県内外にあった標準語制定の機運の裏返しとして方言収集ならびに記述がまとまったと見るのが妥当であろう。また，大正期の方言調査は，この明治期からの機運を引き継いだものと見るべきである。

続いて，大正期の方言研究ならびに記述を見ていく。

３．大正時代の岐阜県方言研究・記述

明治30年代に相次いだ岐阜県方言に関する収集の成果刊行は，その後，いったん休止状態となったが，大正5年(=1916年)の『口語法』ならびに翌大正6年(=1917年)の『口語法別記』刊行に合わせ，調査がおこなわれたようである。「ようである」と述べたのは，その基となった調査結果が，岐阜県に関する限り，下記の２点しか現存していないためである。

・方言調査書類　海津郡役所編（大正4年=1915年）

【概要】　郡内の高須尋常高等小，今尾尋常高等小，海西尋常高等小，吉里尋常小，東江尋常小，城山尋常高等小，石津尋常高等小から集められた手書きの原稿用紙を綴ったもの。校名入りの原稿用紙に校長印が押され通番が振られているものもあり，東江尋常小學校長名のものには件名として「一，方言訛言調　右別冊ノ通リ調製及御報告候也　俚謡ハ未ダ充分調査ヲ遂ゲザレバ近テ報告可仕候」と読めるものが添えられている。受け手は，「海津郡役所第一課長」とあるものと「水谷洋一殿」とあるものがある。郡役所の第一課長クラスが担当者であったことと，きわめて同時期にこれだけの小学校から一斉に報告が上がったことから，優先順位の高い調査であったことが伺われる。

・『大野郡口語法並音韻調査』　大野郡教育会研究部 編（大正5年3月=1916年）
印刷所　岐阜縣大野郡高山町大字三町一，三一一ノ三　高山印刷合資會社

【概要】　「緒言」に「文部省國語調査會ハ本郡ニ於ケル口語法及ビ音韻ノ調査ヲ郡當局者ニ委囑セリ。郡當局者ハ更ニ之ヲ本部ニ委囑セリ。」とあるように，文部省国語調査会からの委嘱によって着手されたことが明記されている。内容は，「口語法取調書」と「音韻取調書」「補遺」の三部よりなる。

「口語法取調書」は，『口語法調査報告書』調査項目と必ずしも一致せず，人を指す代名詞，人を呼ぶ際の接辞，「のみ」に相当する語，物を指す指示詞，場所を指す指示詞，方向を指す指示詞とあったあと，動詞，形容詞，形容動詞（連体詞を含む）の語形変化が挙げられ，さらに，過去，未来，「將に然かせんとしてゐる事をあらはす語遣」などの文末表現が並ぶ。文末表現は，いわゆる学校文法よりも広く機能を細分化して相当する表現を取っている点が注目される。さらに格助詞，副助詞，接続詞，副詞，副助詞が続き，あいさつ表現で終わっている。

「音韻取調書」は，母音の交替，子音の交替，音の長短の交替，清濁の交替，拗音化，直音化という順にならぶ。必ずしも順序は一致しないが，『音韻調査報告書』の項目は多く網羅している。ただし，「けい」を「ケー」「ケイ」いずれで読むかなどの問いについては，当

たり前すぎたのか，回答が見あたらないなど，『音韻調査報告書』の項目とのずれも見られる。

下命による調査としては，上記で満たすものの，やはり俚言についても報告したいという願望が作成者にあったためか，補遺として百数十語の俚言を収録する。

作成者は，「大野郡教育會研究部」とあるが，国立国会図書館所蔵版には，手書きで「代表者　廣瀬亀之助」と添えられている。『大野郡史』によれば，廣瀬亀之助氏は，河合村から養子で高山の廣瀬家に入り，高山小学校女子部の校長に就任後，実科高等女学校を設立，初代校長となった人物であるが，本書刊行の二年後の大正７年に45歳で亡くなっている。優秀な人であったのであろう。なお，岐阜大学図書館の版には，同氏の名前はない。

竹田晃子(p.c.)によれば，この頃の調査結果は全国的にも残存するものわずかであり，岐阜県に2件の報告書類が残っていることが珍しいとのことである。しかし，上に記したように，方言収集の集積物の存在は，そのものが残っていなくても間接的にその存在が伝えられることも少なくない。にもかかわらず，この頃の同種の調査結果がどこにも伝えられてきていないことから考えても，すべての地方について網羅的に調査がおこなわれたというよりは，部分的に，もしかしたら特徴あると判断された方言を選んで，調査がおこなわれた可能性もあるのではないか。

これらとは別に，同じ頃，4編の郡史に方言の記述が見られるようになる。

・『大正四年　吉城郡河合村誌』（大正4年3月=1915年）

【概要】　第十章に「方訛言」として，名詞147項目，動詞44項目，形容詞34項目，副詞10項目が収録される。明治期に大野郡とともに刊行された『飛騨國吉城郡方訛言集』記載の調査結果が，項目数としても削減され，なおかつ村誌の一章となっている点にも着目したい。

なお，『飛騨のことば』（昭和34年）によると，ほかに，同年頃の，高山町誌，丹生川村誌，灘村誌，上枝村誌，大八賀村誌，荘川村誌，久々野村誌，袖川村誌の草稿を参考資料として得た旨書かれている。

・『益田郡誌』（大正5年12月=1916年）

岐阜縣益田郡役所編纂

印刷者　飛騨國大野郡高山町大字三町一六一四番戸　住廣造

【概要】　第32章「人情風俗」の第四節「言語」の部に，いろは順に274語を収録する。共通語訳が付されたのみの簡素な語彙集。

・『山縣郡志』　（大正7年=1918年）

發行所　岐阜縣山縣郡役所内　山縣郡教育會

編輯兼發行者　岐阜縣山縣郡高富町大字高富一二七六ノ四　福井清通

印刷所　岐阜縣岐阜市七軒町二百五十四番地　西濃印刷株式會社　岐阜支店

【概要】　同書のpp.340-351というわずか12pp.であるが，五十音順に387語を収録。特に，可能を表す副詞「イゴト」や，他の記述にはあまり見られない狭い分布を呈する「オサ（畝）」，限定の副助詞の用法をもつ「ガ　例　五銭ガオクレ」のような貴重な記述を含む。

・『本巣郡志』　（大正12年=1923年）

發行所　岐阜縣本巣郡諸團體事務所内　本巣郡教育會

印刷所　岐阜縣岐阜市七軒町十一番地　西濃印刷株式會社　岐阜支店

【概要】　第六篇　民俗篇に，「方言について」ならびに「方言」として62pp.を収める。「地方夫自身より，語そのものよりいへは，自然の經路をふみつゝ，大に獨自の發達をなしつゝ，今日にいたれるものなりといふに，何等の躊躇をなすものに非す。されはこの意義よりすれは，たゝに方言なりとの故をもつて，或はこれを矯正せんとし，或はこれを排斥せんとするか如きは，實に言語の發達を無視し，阻礙し，或は言語の保護を，忘却したるもの，と言はさるへからす。(同：311)」と方言擁護の立場を取りつつも，古語を「正しかりし詞」とみなしていることも見逃せない。方言語彙は，五十音順に語や句を語源を添えて638語を収録する。当地で「馬鹿」のことを「たわけ」ということから「あぜ」を同意に当てるなど貴重な証言も含んでいる。

これらの郡誌（郡志）・村誌の編纂に関し，教育会あるいは教育関係者が関わっていることから考えて，『口語法』との直接的関係はないにしても，岐阜県教育界に方言記述に対するひとつの共通した機運があったことは事実であろう。また，これらの方言記述には，「矯正」などのことばは見あたらない点にも留意しなければならない。ただし，『本巣郡志』にわざわざ方言を正当化するような記述があることからも，必ずしも方言に対する価値が全面的に認められていたとは言い難く，むしろ逆に賛否両論渦巻く状況であったことが想像される。

なお，同時代の次の郡史（郡志）や村史（村誌）の類には，方言に関する記述は見られない。

・『美濃国稲葉郡志』（大正4年=1915年）
・『美濃国加茂郡誌』　郡役所編（大正10年3月=1921年）
・『揖斐郡志』發行所　岐阜縣揖斐郡役所内　揖斐郡教育會　（大正13年＝1924年）
・『養老郡志』岐阜県地方改良教会養老郡支会篇　（大正14年＝1925年）
・『飛騨國大野郡史　上中下』編輯兼發行者　田中貢太郎　（大正14年＝1925年）
・『郡上郡史』編纂兼發行　郡上郡地方改良協會　（大正15年＝1926年）
・『恵那郡史』發行　岐阜縣恵那郡役所内　恵那郡教育會　（大正15年＝1926年）
・『不破郡史　下』（昭和2年＝1927年）

五十音順といろは順があることや，語と句が混在する立項方法が見られることなど，まだまだ方言記述は各地で暗中模索の状況であったのではないか。

４．昭和前期（戦前）の岐阜県方言研究・記述

昭和になると，民間からも方言集が出版されるようになる。

* 『美濃梅原村附近の方言 第2編 私の報告』　信田葛葉著（昭和6年=1931年）
天王寺郷土研究会

【概要】　五十音順に三百数十語を採取収録している小冊子。筆者は，山県郡梅原村の出身ではあるが，大阪在住で本書を発行していることもあって，『山縣郡志』に見られたような特色ある語は継承されていない。「第１編」の存在は確認されていない。

【付記】百部限定の発行のうちの，No.56とあるものには，「島本一様」と筆者直筆の署名が見える。また，表紙には，手書きで「明三三　イ　山県郡厳水村に依って考定」とあり，本編余白に170語ほどの手書きの書き込みも見える。明治33年に，梅原村（現在山県市）からそれほど遠くない，同じ郡内の厳水村（現在岐阜市内）で発刊された方言集があったということであろうか。その存在は知られていない。

・『北飛騨の方言』　荒垣秀雄著（昭和7年=1932年）
刀江書院　（昭和50年=1975年，国書刊行会より復刻）
【概要】　飛騨地方北部，旧吉城郡のうち，東部方言を中心に，まとめたもの。現在の飛騨市神岡町船津で商売をしていた父の遺稿に，朝日新聞に勤めていた筆者が採取したものを加え，約2200語を収録する。参考資料として『大野郡口語法及音韻調査』も挙げられており，最初に「音韻轉訛例」の記述も見られる一方，「〇〇ンサル，ンサッタ，ンサイ，ンサンナ」のように，用言に付加される要素も分析的に示している。

このような中で，やはり教育関係者が中心となって，方言の記述が各地でおこなわれた。

・『恵那郡中野方ヲ中心トスル方言ノ研究』 中野方尋常高等小學校（昭和6年=1931年）
著作兼發行者　岐阜縣恵那郡中方尋常高等小学校　山田郁哉
印刷所　岐阜縣恵那郡岩村町大通路　高踏社
發行所　岐阜縣恵那郡中野方村　岐阜縣恵那郡中方尋常高等小学校
【概要】　「序」には，「職員共同の研究物」であるが，「学年末と年の暮の多忙裡に編纂せられし」ために「研究不十分な為め通俗的となつて学問的でないものではあるが将来の系統的研究の第一歩として謄写する事にしました」とある。また，上記の『東濃方言集』の他，上田万年・松井筒治著の国語辞典，金沢庄三郎著の広辞林を参照した旨書かれている。「序」には「昭和五年十二月」とある。五十音順に1500語を収録。

* 『岐阜縣の方言』　岐阜県小学校長会編　岐阜県小学校長会(写)（昭和8年=1933年）[1]
岐阜縣岐阜市京町尋常高等小学校内　岐阜縣小學校長會　代表者　佐藤貞治郎
【概要】　面相筆で書かれ，各ページ11語×86ページ，約900語を収録。p.87には，「本書に採録した方言は，原書にあつた全部ではなく，教育上矯正すべき必要があると思つたもののみ」との記述がある。この「原書」とは何かは書かれていない。同箇所には，「本書に引用した書物は，岐阜方言（太田榮太郎氏），岐阜縣方言（松平静氏），東濃方言集，北飛騨方言，各郡志等である」とある。実際に，内容としては，語の配列や使用地域の記述に関し，あきらかに明治36年刊の『岐阜縣方言』を基礎とし，各部（語頭音別）に数語を加筆したものとなっている。

・『大井を中心とする方言の研究』　岐阜県恵那郡大井尋常高等小学校（昭和8年7月=1933年）
【概要】　「巻頭言」に「限られたる地域に行はるゝ方言，訛言を避け，標準語の使用に慣れしむることは国民教育上留意すべき事なりとす。」とあるように，やはり方言矯正を目的とし編纂されたものと考えられる。収集は，同校長により同校の郷土資料調査部ならびに笠置第一小学校国語研究部に委嘱しおこなわれたもの。
　収録語彙数は1000語弱（笠置地区の100語を含む）。五十音順に訳のほか一部語源を示す。例文は笠置の一部にあるのみである。

・『岐阜県方言集成』　瀬戸重次郎/著（昭和9年=1934年）
大衆書房

1 岐阜県図書館の登録には，1934年＝昭和9年であると書かれているが，同書の奥付には「昭和八年六月三十日發行」と記されている。

【概要】　6700語を収録する岐阜県内最大の方言語彙集である。著者の瀬戸氏は，自序にもあるとおり，岐阜県師範学校の教員であった。同校奉職中に生徒から，また広く各地方の小学校教員から方言を収集した。語以外にも挨拶や頻用される表現等も採録し，多くの語についてその語源考証もおこなっている。序を請うた神保格東京文理科大学教授，東條操学習院教授，今泉忠義國學院大学教授ともに，方言を標準語普及のために撲滅しようなどとは考えていなかったであろうことからもわかるように，本書の編集方針もきわめて中立に方言を収集しようと努めていることが理解される。この点は，この時代にあって特異な存在となっている。

・『城山村を中心としたる方言集』　服部俊三著　城山小学校（昭和9年=1934年）

【概要】　阿部から遠部まで，900語弱を収集した俚言集。「矯正スベキ語」に「正語」を対応させ，備考欄には語源説も一部記してある。項目の整理の仕方から，明治35年刊の『養老方言集』を真似たものと考えられる。一方，海津郡役所編による『方言調査書類』（大正4年=1915年）に城山小学校の名が見えることから，やはり何らかの継続性と考えてよいであろう。

前書きも後書きも一切見られず，どのような経緯によって編纂されたのかは，まったく不明である。

・『きりゐのことば』　加茂郡蘇原村切井国民学校編（昭和16年=1941年）

【概要】　紐綴りの謄写版による小冊子。序言を含め，本書の成立に関する記述は一切見られない。35枚に1,000語弱が，方言，標準語訳，用法その他と五十音順に収録されている。明らかに異なる数人の筆跡が認められることと，現在でも常用漢字に含まれない漢字も多く用いられていることから，同校の教員の共編であることが推察される。

以上の方言集・方言研究には，すべて教育関係者が直接に関わっている。このころの方言に対する多くの教育者の感情は，純粋に方言を保護したいというものでは決してなかったであろうが，方言を擁護する立場があったこともまぎれもない事実である。

一方，このころ，飛騨地方では江馬三枝子らによる雑誌『ひだびと』(昭和8年〜昭和19年：ただし，昭和10年以前は『ひだびと』の名での刊行ではない)が刊行され，地域研究が進んだ。そんな中で方言も，民俗学，考古学，小説等に多くの紙幅が割かれ決して中心的な関心事ではなかったが，編輯部編による「飛騨方言集」は，昭和10年から12年にかけて23回掲載され，多くの語彙の記述がなされた。その後，長岡博男「飛騨方言と加能方言」(第5年11号＝昭和12年)，村田祐作「カンナイ考」（第6年6号），宮本常一「飛騨方言」（第6年10号），柴田武「飛騨の言葉」（第6年11号）瀬川良三「挨拶の言葉」（第7年3号），宮本常一「『ビ』と『ベ』」（第7年5号），中村星湖「『ビ』と『ベ』の問題について」（第7年6号）のほか，柴田武「飛騨方言のアクセント」（第8年4号＝昭和15年）など，次第に方言に関する論考が多く見られるようになり，人々の方言に対する関心も高くなっていったことが伺える。

昭和9年には，岐阜縣女子師範學校から『郷土研究　第一輯』として，岐阜県内の人口，交通，産業，厚生のほか，民謡と方言に関する論考が刊行されている。

・「語法上から見た岐阜縣下の方言の研究」加藤道郎　岐阜縣女子師範學校『郷土研究　第一輯』（昭和9年＝1934年）

【概要】　「序言」に見られる「郷土の方言の研究は實に我が生きた郷土の言葉を通して，伸びつゝある郷土の相の一面を知ることの出來る貴い仕事であることを確信する」ということばからもわかるように，方言を矯正するなどの目的を含まず，純粋に研究する方向性をもっておこなわれた研究であることが伺われる。方法については，東條操選定による「方言調査問

題」の中から50題を，県内の250以上の小学校に依頼して調査した通信調査によるものであるが，回答が部分的にしかなかったことと理解齟齬によって，詳しい分布は得られず，各郡のおおまかな分布を示すに留まっている。

調査された項目は，命令形語尾，「する」，「みせたら」と「みしたら」，動作持続の形式等の動詞に関するもののほか，断定，推量，勧誘，希望，否定等の助動詞，副助詞，終助詞や敬語まで，広く網羅している。15枚の言語地図を含むが，前述通り，各郡での分布を示すに留まっている。文法に関する詳しい分析はおこなわれず，主に形式の変異を解説することが中心となっている。

昭和13年には，同校からまとめられた『郷土研究』にも加藤道郎氏の同論文は収められている。また，次のような論考も見られる。

・「恵那郡に於ける方言管見」加藤道郎

【概要】　恵那郡各地の方言について，特に，文法と音韻面から考察した論考。一例を挙げれば，原因・理由の接続助詞について，「んやで」「で」「もんで」「もんやで」「もんだで」「むんやで」等多様な形式の収集をおこなうが，それらの形式の違いについては踏み込んでいない。

・「音韻變化より見た我が校下方言の研究」加藤道郎

【概要】　岐阜県内の方言に見られる語彙の音韻対応を分析したもの。実例が多く挙げられている。

・「岐阜縣に於ける方言の分布」船津生国

【概要】　橘正一「方言學概論」，瀬戸重次郎「岐阜縣方言集成」，荒垣秀雄「北飛騨の方言」，東濃四郡聯合教育會「東濃方言集」，東條操「簡約方言手帖」を参考に100語を挙げ，県内の分布を見たもの。ある語についてある地方に複数の方言形式が存在することを前提に，分布を数字で示している点が特徴的である。たとえば，項目24の「紙鳶（たこ）」は，近畿形の「イカ」も飛騨地方から海津や恵那まで県内全域で用いられているが，それでも「タコ」ほど優勢ではないことが一目で分かるようになっている。貴重な資料である。

各教科の教員が岐阜県内のあらゆる教育に役立ちそうな事象について，つぶさに研究をおこない，それを報告し，また教育に活かそうとしている姿が見られる。現在の，教育方法一辺倒で教育内容を重視しない岐阜県教育界の研究方針とはまったく異なる点が興味深い。

このほかに，益田郡萩原町（現 下呂市萩原町）出身の都竹通年雄氏による，次のような論考を見ることが出来る。

・「飛騨萩原方言に於ける動詞と形容詞との活用」都竹通年雄著　日本方言学会 1941

【概要】　題名の通り，活用語について既存の文法の枠組みにとらわれず，方言をありのままに描く先進的な論考である。また，アクセントがすべての活用について付されている点が，特徴的である。都竹氏21歳の時の論考であるが，10歳の頃，郷里を離れ一家で東京に移り住んだことがかえって方言への感覚を鋭敏にしたと言えようか。ずっと岐阜県を離れていたために，県内の方言を中心に据えた論考はこの後書かれなかったことが残念である。

終戦間際には，詳細不詳であるが，次のような調査もおこなわれた。

・『安八郡神戸町方言調査』　加納智枝子著（昭和20年頃=1945年）

【概要】　著者およびその編纂動機について詳しいことはわからない。前書きとして「私は標準語教育の必要性及び方言といふものについて自分の思ってゐることをかいてみた　この考へが果して正しいかどうかは確信できぬのであります」とあるが，決して方言を否定的に捉えていたと断言できることばは使われていない。

資料的には，18ページ500語ほどの語彙集と，否定，依頼，推量等の文末表現や挨拶表現のほか，「学校へ行く」「洗濯に行く」などの場面会話例，「初等科の女生徒」「初等科男子」「二十歳ぐらいの女子」「百姓と商人」など，社会的なグループによる会話例が，方言と標準語で書かれており，価値が高い。

太平洋戦争以前の昭和初期に上記のような考察が多くなされたことは，学問的に一定程度の成熟期を迎えたものと考えてよいのではないか。同時期に，隣県，愛知県では，雑誌『土の香』(1928-1937?)が，幅広い民俗学的考察の中に質の高い方言に関する論考を全国から集めて出版していたし，富山県では，金森久二氏が『越中方言研究彙報』第１輯～第６輯(1931-1932)という，この時代においては極めて高いレベルの考察を次々に刊行していた。美濃と飛騨に距離的にも近かった，これらの特筆すべき研究から，岐阜県の方言研究がどのような影響を受けていたのかを知る手がかりは，参考文献等に記されたものとしては今のところ得られていないが，時期的に考えれば十分に影響を受けていたと言えるであろう。岐阜県における，昭和初期の方言研究は，明治から大正にかけてのような官制の潮流ではなく，個人的関心の高まりの結果として得られたものであろう。

５．昭和後期（戦後）の岐阜県方言研究・記述

戦後となり各地で方言集が編まれるようになった。特に，早い時期に着手されたのが，中学校や高校の志ある教員によるものであった点は着目に値する。県内では，次の4点の存在がわかっている。

・『福岡地方方言考』　福岡中学校文化部編　安保蘇北（昭和27年頃=1952年）[2]

【概要】　奥付もないガリ版刷りを閉じたもの。指導・編纂したのは「自序」に名前のある安保蘇北氏。自立語編と付属語編の二部構成で，自立語編には，「方言的色彩濃厚なる自立語」として，名詞，動詞，形容詞のほか，「アカン」など若干の「句」と記された表現を含む253項目と，音変化による50語ほどを含む。『物類称呼』等の記述も付記され語源説にも言及している点が特徴的である。

付属語編は，受身，使役，可能，断定，否定打消，推量，推量疑問，比況，希望，意思，敬語，時（未来形，完了形，進行形，現在態）からなる助動詞の部と，格助詞，副助詞，接続助詞，終助詞からなる助詞の部からなる。「推量疑問」の「やらず」や「意思」の「ず」の語源として，打消の助動詞「ず」からなるとしているなど誤りも少なからずあるが，いわゆる学校文法の文法に則って記述され，特に付属語の記述が多い点は，特記に値する。

指導した安保蘇北氏は，本名，安保生（すすむ）といい，旧福岡町出身で，1950年から56年まで福岡中学校に英語講師として勤務された。『福岡町の方言』は福岡中学校勤務期間に出版されたことが前書きからわかるのみで，奥付もなく出版時期の記述もないため確定は難しかったが，福岡町に残る書類から1952年の著作であることが確認された。

・『郡上方言 第1集　語彙編』　郡上高等学校方言研究会（昭和27年=1952年）
　編集代表者　岐阜縣郡上郡口明方村岐阜縣立郡上高校内　野田直治

2 岐阜県図書館の登録には，「1950年頃（＝昭和25年）」と記されている。

発行者　岐阜縣郡上郡口明方村岐阜縣立郡上高校内　岩崎正美
発行所　岐阜県立郡上高等学校方言研究会

【概要】　収録語数，記述内容ともに，この時期に県内で発行された方言の記述の中で，間違いなく最優秀である。収録語彙数は，2000語弱であるが，さらに，共通語からの逆引きも付され利用者の便宜も考えられている。本書は『語彙編』とあるが，付録として，郡上方言の語法，郡上方言の音韻転訛，郡上郡におけるいろりの座席名，郡上郡の概要などが付く。特に，「語法」（文法）は，特に，文末のモダリティ表現を中心に4ページほどの記述であるが，簡便にまとまっている上，「卑下の表現」とされる「カリテ＝イク」などの謙譲表現等，貴重な指摘が多く見られる。

本書は「まえがき」にあるように，国立国語研究所の方言調査を担当していた岐阜大学教授の筧五百里氏からの依頼がきっかけで始められたものであるが，地元の21名の高校生と指導された野田教諭のたゆまぬ努力，そして全校生徒とその保護者の協力がなければ達成されなかった。

【付記】　野田直治教諭は，その後も，「郡上方言の敬語表現」（『郡上高校四十年史』1959年）を著すなど，精力的に郡上方言の研究をなされた。

・『中津川を中心とした恵那ことばの研究　Ｉ　』　岐阜県立中津高等学校郷土研究部言語班（昭和31年=1956年）

【概要】　中津高等学校の部活動として，顧問の谷開石雄教諭の指導の下，部員11名によって始められた方言収集であり，１年と３ヶ月余りで編纂されたと「まえがき」にある。方言集としては異例の「標準語」引きとなっており，「相変わらず」に対して「ズット」という方言が挙げられ，さらに「ズット　ソンナ　コト　ヤットルノカ。（ずっとそんな事をやっているんですか。）」と文例が添えてあり，さらに，どのような場面で使うか（上記項目では「普通」とある）が書かれている。これは，たとえば，「えがらっぽい」という標準語（注　共通語でも「えがらっぽい」のほか「いがらっぽい」も用いられる）に，「エゴイ」「エガイ」の俚言２形が書かれているように，方言としての語形に揺れがある場合が多いための措置と考えられる。

語彙として，「標準語」項目およそ650項目からなり，郡上方言でも「おじゃまする」という意味の謙譲語として用いられる「カリテイク」「カリテクル」などの貴重な語彙を採取していることも本語彙集の特徴であるが，同時に各語に付けられた例文から，文末形式を，殊に待遇や場面ごとに拾えることも優れた点である。

・『飛騨のことば』　土田吉左衛門著　濃飛民俗の会　（昭和34年=1959年）
発行所　濃飛民俗の会

【概要】　著者の土田吉左衛門氏は，岐阜師範学校専攻科卒で，出版当時は，岐阜県立吉城高等学校教諭であった。飛騨全域を網羅するごとく集められた語彙は，600ページ以上にも及び，1ページ20語で計算しても，ゆうに一万語を越えるものである。また，特に助詞・助動詞に関する記述も十数ページにわたって試みられている。意志・推量の「ず」をいわゆる「いるま言葉」との説で説明するなどの誤解もあり，また，分析は掘り下げが欠ける点が残念である。

・『本巣郡根尾村大須のことば』　大久保甚一編（昭和38年=1963年）

【概要】　大須中学校にて大久保甚一氏によって集められた2000語あまりを収録する語彙集。大

須中学校教諭の大塚金夫氏への謝辞があとがきに述べられているが，著者自身の中学校との関わり方，あるいは肩書きは記されていない。収集に三年を費やしたことは述べられているが，どのような経緯で収集するに至ったのかなども記されてはいない。

なぜ，このような高いレベルでの記述が中学校や高校の，いわゆる部活動で可能となったのであろうか。国語教育が戦後歩んできた道を振り返り，誤りを正すために考えておかなければならない。

このような記述は，ひとりの才能ある教諭の指導でなったという面は否めない。実際，そこにかかわった生徒たちは，それぞれに一生懸命であったが，やはり生徒たちだけで達成できる記述ではなかったようである。しかし，指導する側がいくら一生懸命になっても，ひとりでは大部な報告をなすには至らないし，記述するだけの素材も集まらない。生徒の能力と地域住民の広範な協力が不可欠である。それを可能にするのは何か。それは，教育である。教育という枠組み全体が潤滑に動いていてこそ，このような研究は達成される。

戦後，これら３つの研究を最後にして，中学校や高校での方言研究は，生徒たちから遠い存在へと離れていった。その原因はどこにあるのか。それは，文学に過重に偏在した教育であり，文法をはじめとした言語分析を軽視した国語教育にあるのではなかろうか。理系の分野においては，現在でもロボットコンテストなど，高校生の才能がいかんなく発揮される場が提供されているが，言語を分析対象として中高生がひとつの成果をなしたという話は，聞かれなくなった。時代の要請も変化してきているのであろう。

しかし，このような中でもことばに関心を持ち指導をおこなった教員はいた。その成果として，中学生や小学生の手による方言の記述が，わずかではあるが，我々が今日知るところとなっている。

・岐阜県揖斐郡春日村のことば　春日中学校二年　日下部ちず子・早矢仕みすゞ著　大久保甚一指導（昭和41年頃？＝1966年）

【概要】　昭和41年11月28日の日付があるが，奥付等もなく詳細は不明。揖斐郡の方言の概説から始まり，アクセントについては，揖斐郡およびその周辺の分布を「揖斐川上流域綜合学術調査報告書」から引用した上で，独自の調査から詳細に述べる。語についても，春日村の三束，中央，六合各小学校下ママで分けて，その違いを300語以上にわたって詳細に記述する。

・『ほくのう風土記』　北濃小学校６年生著　（昭和43年＝1968年）

【概要】　わずか36語（表現）であるが，「だしかすかい」（だめだ）や「だらけつ」（いやだという意味をあらわす）など，『郡上方言』にも見られない語・表現を含むほか，「なまづけない」には「（なまかわ）」と訳が振られており，美濃地方南部で用いられる怠惰を表す「なまかわ」が共通語との意識で捉えられていたことを示す貴重な資料となっている。当時の担任など，本文集の作成に携わった人の名は，わずかしか記されておらず，『郡上方言』との関連性は不明であるが，高校生の調査が直接・間接的に影響を及ぼした可能性も否定できない。

教育研究所としては，この時期，わずかに次のような書が編纂されたのを見るのみである。

・『多治見を中心とした土岐方言集』　多治見市教育研究所編（昭和32年=1957年）

【概要】　国語指導，生活指導などで問題となる言葉遣いの問題のほとんどが方言と共通語との問題に起因するとし，「方言と共通語の問題に就て，特に郷土方言に対する私たち自信の構えをどう持つたらいいかという事に就て，何とか一つの方向を見いだしたい」として編纂されたと「はじめに」にはある。一見，方言の使用に対して理解を見せながらも，「子供に

正しいことばづかいを指導しなければと主張する先生自身が，方言丸出しでずいぶんひどいことばを使つているのではないかと批判する人もあります」など，やや方言に対しては否定的な態度に偏っているように見える。また，「方言も共通語も夫々よさがあるのだから，その使い場所さえわきまえれば，むしろ両方とも使いこなせることの方が大切であると，両刀使いの指導によつて問題は解決するかのように思いこんでいる人々もあるようです。」と残念な記述も見られる。

興味深いのは，同研究所が昭和49年に発刊した『多治見のことば』では，「特色ある郷土色は失われ，現代の雑然とした言語にむしばまれ，その姿を埋没されてゆくことは，まことに惜しいことであり」，「その失われつつあるふるさとのことばをなんとかして記録にとどめておきたい。私たちの心をはぐくんでくれたふるさとのことばを，そっと心にしまっておきたい。こんな願いがこの本の発刊のきっかけとなった。」と述べていることである。

さて，方言と共通語のバイリンガルは，本当に不可能であるのか。植民地でもないのに英語教育をこれほどにまで熱心におこなう学校教育において，言語の系統も大きく異なり発音も語彙も文法もまったく異なる英語の習熟を目指すのであれば，共通語と発音も語彙も文法もそっくりの方言を共通語と使い分けるなんてことは雑作もないことであることは，すぐに気付くことである。矛盾を感じないわけはない。むしろ，このころの教育関係者の中に巣くっていた，方言＝品の悪いことば，公の場面では使えないことばとの偏見によって，書きことばはおろか話しことばからも駆逐され，方言集という永代供養の場のみが与えられる，国語教育が奪い去っていった方言の墓標を刻まんとでもしているような態度が，残念ながら，この一定程度先進的な態度を呈している『多治見を中心とした土岐方言集』にも感じられる。

このほかにも，(元)教員によって編まれた方言集には，次のようなものがある。

・『方言考』　佐賀松彦著（昭和53年=1978年）

【概要】　謄写版14ページの小冊子であるが，「最近の方言利用度－調査から」として，可児町立（当時）帷子小学校6年生児童113名に，22の方言について児童自身と家人や近所の大人の使用率を調査結果したものを含む。当地は団地に住む児童の多い校区で，この調査は本来的な方言調査というよりはニュータウンを対象とした社会言語学的調査の側面を有するものとして注目に値する。ほかに，方言語彙の語源についても言及している箇所がある。

・『中津川旧市内地区方言稿』 土井裕夫著　（昭和58年=1983年）

【概要】　39ページ分の俚言集もさることながら，昭和43年に採録されたという手賀野地区のお年寄りの談話の書き起こしは，談話独特の間投助詞や終助詞をふんだんに含み，また，聞き手にどの程度確認要求をしながら談話を進めていくかなども詳細にわかり，非常に貴重な資料となっている。

著者の土井氏は，昭和18年岐阜師範学校を卒業し，東濃地区で小中学校の教諭（中学校では国語を担当）として教育に当たったかたである。中津川西小学校の児童を多治見に引率した際に児童のことばが店の人に通じず苦労した回想を載せていることから，おそらく，最初は方言に対し特に好意的な感情を抱いていたわけでないことが推察されるが，昭和40年代から50年代に，交通，標準語教育の成果，テレビの普及，人的交流の拡大などの理由により，中津川方言が急速に消滅しようとする状況に危機感を抱き方言採取をおこなった旨，「はじめに」に書かれている。

・『石徹白の生活文化』須甲すゞゑ著　（昭和62年=1987年）

【概要】　「石徹白の方言」として約500語を収録。

著者の須甲氏は石徹白小学校の教諭を長く勤めたかたで，同地区に居住である。

・『岩(岐阜市)の方言 ほろびゆく故郷の言葉をもとめて』　丹羽武男著　（昭和63年=1988年）

【概要】　著者の丹羽氏について，生年等は不詳であるが，岐阜師範学校を卒業し，関市安桜小学校ならびに旭ヶ丘中学校長を歴任しているとの略歴が巻末に示されていることから，長年教育に携われたかたとわかる。専門は社会で，「まえがき」には，「国語は専門でないし，ましてや言語学も学習していないので不明な点も多く誤りも多いと思う」との謙遜が述べられているが，約1000語にも及ぶ語彙は，岐阜市の語彙集としては貴重な分量を有している。巻末には「方言にあらわれているいくつかの傾向」として，文法事項などが15項目挙げられている。「知らすと帰った（＝知らずに帰った)」のような否定接続表現や，岐阜市東部のこの地区では，進行を表す「〜よる」が用いられていることなど，貴重な記述も見られる。

このような教育関係者の方言記述が比較的多く見られることからは，地域地域を一定以上の知的水準で観察しまとめる能力のある人が分散的に各地に居住していたという，教育のひとつの役割を垣間見ることができる。殊に方言とは，地域に居住して日々過ごす中の観察から得られる部分が大きい。そこに居住する人に一日の長がある。

しかし，厳しい言い方であるが，同時に，観察・記述いずれの観点から各時代の日本における水準に及ぶものであったかは考えなければならないだろう。「一日の長」でしかないのか，それともやはり優れているのか，それぞれについての判断は刊行物からなされなければならない。方言に対する態度は，筆者の力量や勉強量だけで作られるものではなく，やはり，それを伝えるべき地域の知的財産の核としての大学のあり方やその伝え方も合わせて考えていかなければならない。

それでは，岐阜大学ではどのような方言研究と教育がおこなわれ，それらがどのような人材育成へとつながっていったのか，戦後の岐阜大学での研究成果から見ていこう。

岐阜大学では，物集高見や大槻文彦などの年譜作成でも知られる筧五百里氏(1896-？，在任1948-1960)が，岐阜師範学校から岐阜大学学芸学部へと改組した直後の昭和20年代半ばに，次のような報告をおこなっている。

・『岐阜県方言の概観』筧五百里　（昭和25年＝1950年）

【概要】　個別語彙の方言地図15枚と区画略図１枚を含む概説。

・『昭和廿六年度　岐阜県方言の文法に関する調査報告』筧五百里（昭和26年＝1951年）

【概要】　県内７地点の方言の文法的特徴を概観。格助詞の「が」や「を」，指定辞，動詞の活用などの基礎的な項目に加え，能力可能と状況可能，進行の「よる」，否定疑問に対する応答詞など，独創的な項目をも含むが，記述が細かくないところが残念である。

・『昭和廿七年度　岐阜県方言調査報告』筧五百里（昭和27年＝1952年）

【概要】　県内７地点における，人称詞や働きかけの表現などの特徴を敬意ごとに描く。終助詞によっても敬意を表すことなど，この時代においては先進的と思われる指摘もある。巻末には，「岐阜県方言書目補遺」があり，下記「目録」につながっていくものと考えられる。

・『岐阜県方言書目録』筧五百里（昭和29年＝1954年）

【概要】　現在では岐阜大学図書館にも岐阜県図書館にも所蔵されない考察についての言及も多く貴重な目録である。特に昭和６年から８年にかけては，飛騨三郡の各学校で，「方言調査」がおこなわれ「方言矯正表」が編まれているとの記述は，４節に挙げたものを補う非常に重

要な指摘である。これらの原本が残っていればさらに多くのことがわかるであろう。

この中には，次のような貴重な写しがあり，現在，その内容に触れることができるのも，筧氏の尽力に負うところが大きい。

・『岐阜県稲葉郡加納町附近　尋常小学国語読本に表はれた方言標準語のアクセント対照』　梅沢伍郎著
筧五百里氏の『岐阜県方言書目録』によると，著者自身から借りて昭和27年(=1952年)複製したとの旨あるが，原本がいつのものかは記載されていない。「尋常小学」とあることから，もちろん戦前のものである。
【概要】　五十音順に，1100語あまりについて，「標準語」と当地方言のアクセントを対照して示す。題名にあるように，小学国語読本に表れた語についてのみ記載されているため，たとえば「赤く」はあっても「赤い」はないなど，活用語全般について知ることはできないという難点があるが，貴重な資料であることは言うまでもない。

また，奥村三雄氏(在任1956-1969)は，学生指導にも尽力された。その成果は，次のものとして一端が見られる。

・『揖斐郡徳山村方言』　岐阜大学教育学部編（昭和44年=1969年）
・『岐阜県方言の研究』　奥村三雄編　大衆書房（昭和51年=1976年）

この『岐阜県方言の研究』は，奥村氏が九州大学へと去られたあと，教員として岐阜県内に就職した元教え子を通じて調査をし，教え子たちが執筆したものをまとめたものである。新任の教諭として各地で忙しく教育の研鑽に励むかたわら，奥村氏との手紙でのやりとりを通じて本書はまとめられた。各章の執筆者は，皆，県内の小中高校の国語教員であり，最終的な分担執筆の詳細までは明記されていないが，それぞれの得意分野での記述を中心に（逆に言えば，すべての地域が均等に詳しく書かれているわけではないが）岐阜県の方言研究書として，大きな影響を与える書となっている。
特に，同著執筆者の一人である加藤毅氏は，精力的に岐阜県内の方言を調査し，次の著作物を著している。

・『岐阜県方言地図 滅びゆく言語を尋ねて』　加藤毅著　岐阜国語研究会　（昭和43年=1968年）
・『滅びゆく方言を尋ねて 美濃と飛騨』　加藤毅著　岐阜方言研究会　（昭和51年=1976年）

加藤氏は，岐阜市内の小学校長を経て退職されるまで，県内の国語教育に長く尽力されたかたである。また，平成になってからも『岐阜県方言地図』を三冊，中心となって編纂するなど積極的に方言研究にも携わってきた。岐阜県方言の分布が概観できることは，氏の業績によるところが大きい。

岐阜県の大学教育においては，岐阜女子大学に昭和45年から昭和60年のご逝去直前まで勤務された菊沢季生氏の存在も忘れてはいけない。明治33年三重県名張市の生まれで東北大学出身の同氏による岐阜県内の方言に関する研究は，『菊沢季生国語学論集第五巻』（1989教育出版センター刊）に収められたものだけでも，「御嵩町周辺の方言語囲」「古川町の方言語囲」「根尾村の方言語囲」「東濃地方の方言語囲」など，広範囲にわたる。
特に，御嵩町のものは，100ページ以上にわたり詳細な語彙が収集されており，用例も豊富である

上に，語源や全国分布を含む語釈もふんだんに添えられている。難点をあえて挙げれば，用例が実例ではなく，俚言部分を共通語の文脈に当てはめただけのものであることが残念である。上に挙げた同町の佐賀松彦氏が何らか関わっていたようであることを考えれば，より自然な例文が挙げられていてもよかったであろう。また，この「御嵩町周辺の方言語囲」は，何より『御嵩町史』の「第11章　御嵩の方言」と基本的に同一である。

岐阜大学以外にも，特に，昭和50年代から，各地の大学から多くの調査があり，次のような結果が刊行されている。

・『岐阜県数河方言の生活語彙』　野口敦子 丹羽一弥共著　（昭和51年=1976年）
・『郷言　岐阜県飛騨地方』　上下巻　関西大学方言研究会編集部編（昭和52年=1977年）
・『岐阜県揖斐郡徳山村戸入方言』　山口幸洋編　（昭和58年=1983年）
・『尾張と中濃の境界地域言語地図集』　太田有多子 中川玲子編　椙山女学園大学文学部（昭和58年=1983年）
・『岐阜県揖斐郡徳山村塚方言』　山口幸洋編（昭和61年=1986年）
・「愛知・岐阜のアクセント 1〜3」山口幸洋著『名古屋・方言研究会会報』1984〜1986
・「岐阜県徳山村方言による自然会話」久木田恵著 『名古屋・方言研究会会報』1985
・「岐阜県下のアクセント 1 」山口幸洋著　『名古屋・方言研究会会報』1987

すでに上で取り上げたものを含め，昭和40年代からは，まさに，岐阜県の方言研究は百花繚乱，地域地域でいろいろな書物が刊行された。その目的，収集対象，分析のレベルはまちまちであるが，ちょうど高度成長で社会構造も大きく変わり，「方言が失われつつある」という機運が高まってきた頃の産物である。

・『飛騨の「ことば」と風土の考察』　大谷千尋著（昭和43年=1968年）
・『八百津弁集』 永田雅己編（昭和44年=1969年）
・『八百津弁集 語源解釈補遺』　永田雅己編（昭和44年=1969年）
・『岐阜ことば』　森勇三著　大衆書房（昭和47年=1972年，1975年増補版）
・『多治見のことば』　多治見ことば編集委員会編（昭和49年=1974年）
・『美濃のじゃことば 西濃地方旧青野ケ原地方言』　竹中誠一編　じゃこめてい出版　（昭和51年=1976年）
・『方言集 大垣市赤坂地区』　田部円三著　（昭和54年=1979年）
・『旧青野ケ原方言考』　竹中誠一編　大衆書房（昭和55年=1980年）
・『ふるさとのことばあつめ』　柴田八郎編　（昭和57年=1982年）
・『美濃白川の方言』　白川町ふるさと研究会編　白川町中央公民館　（昭和58年=1983年）
・『不破の方言 関西ことばと関東ことばの出会い』 不破のあゆみ編集委員会民俗部会　不破のあゆみ編集委員　（昭和58年=1983年）
・『布るさとの言葉』　柴田八郎編　（昭和59年=1984年）
・『いろは歳時記 飛騨弁版画集』　岩島周一著　岐阜日日新聞社（昭和60年=1985年）
・『恵那の方言』　永井八重子著（昭和60年=1985年）
・八幡町の言葉　杉田理一郎編　八幡町教育委員会（昭和62年=1987年）
・『馬瀬村の方言』　二村利明編著（昭和63年=1988年）

また，上記の『名古屋・方言研究会報』をはじめ，東海地方というくくりでも考察がおこなわれてきている。

・『東海のことば地図』　竹内 俊男著　六法出版社（昭和57年=1982年）

6．国語教育と方言

主として教育との関係の観点から岐阜県の方言研究誌を概観した。

岐阜県の方言研究は，すでに江戸時代の『飛州志』に萌芽が見え，明治30年代には，全国的な標準語制定の機運と相まって，県内各地で多くの方言集がまとめられるにいたった。これらは，多くが各地の「教育会」が主導したものであり，教育界に広く共有されていたであろう，「標準語への矯正」の目的が垣間見える。一方で，直接的あるいは間接的に，このような方言収集の動きは，岐阜県内各地で，純粋に方言への関心をかき立てる種まきともなったのは事実であり，昭和初期になると，師範学校の教員や各小学校における方言収集活動へとつながっていった。

もちろん，この時代に方言が価値あるものとして捉えられていたのは，大勢ではなかった。東濃の土岐市鶴里町では，このころに方言札が用いられていたとの証言もあり，常に「正しい標準語への矯正」という圧力はあった。そこに荷担したのは，まぎれもなく国語教育であり教育者自身であった。

国語教育で教えなければならないことのひとつに，齟齬のないコミュニケーションがある。方言に限らず，特定の位相をもつ言語は，内部の連帯感を強めると同時に外部との関係遮断をも強要する。方言のみで住み続けられるような時代でもないであろう。まったくの昔ながらの方言を話すことを強要してもしかたがない。しかし，歴史あることば，風土を反映したことば，心情を吐露できることばを，人の口に取り戻すこと，特に，子どもたちにことばを与え続けることは，何を措いても重要なことである。国語教育は，もう一度，そのような観点から，自分たちの母語を育てる教育を取り戻していかなければならない。

そのためには何をしなければならないのか。まずは，ことばへの素朴な関心を持たせる国語の授業が必要である。ことばへの関心を通じて，方言に存在する，上述の意味での価値のあることばを常日頃から教育現場に取り入れていくことが大切である。方言を何でもかんでも教えればよいのかと言えばそうではない。自由を奪うようなやり方は，真の教育ではない。方言に存在する言語システム，語彙の価値など，客観的に考える時間さえあればよい。それを通じて，子ども自身が考えられるようになっていけばよい。

教師はどうあるべきか。もちろん，知識としてさまざまな方言に関する事項を知っておくことが望まれるが，やはり，子どもたちと共に考え，知らないことを地域に教えてもらうような柔軟性をもっていくことがより重要である。

7．おわりに

岐阜県の方言研究は，実際，立ち後れている印象をぬぐえなかった。戦前の春陽堂から発刊されていた雑誌『方言』にも，一編の岐阜県方言だけを取り上げた調査報告もなく，戦後も，奥村三雄氏が岐阜大学に在職したわずかな間の遺産である『岐阜県方言の研究』くらいしか，市販の研究書は見られない。各地の語彙集は存在しても，方言研究がひとつのつながりとなって継続的におこなわれてきた痕跡を見いだしにくいことは，岐阜県に生まれ育ち，今，方言についての研究をする立場となった筆者自身，常々残念なこととして感じないではいられなかった。

そんな中，あるきっかけで明治・大正期の国語調査会に報告された方言調査書について調べることとなり，本考察を編むこととなった。すると，この時期には，他県と比較するべきものではないのかも知れないが実際優るとも劣らないほど熱心に方言収集がおこなわれたことが垣間見えた。このことは，ひとりの岐阜県民としてもうれしいことであった。

ただ，その後の岐阜県教育界の方言文化に対する姿勢は，決して好意的なものではなかったことが残念である。隣県愛知県は，特に名古屋を中心に，江戸時代から方言文学が花開き，名古屋市教委も戦後，文化財叢書として多くのことばに関する伝統を伝えようと努力してきた。方言調査に関しても，昭和8年に愛知県女子師範学校郷土室の黒田鉱一氏を中心に大部な『愛知縣方言集』が編まれ，昭和56年度から58年度にかけての「方言緊急調査」に関しても，愛知県教育委員会編『愛知のことば』（昭和60年）ならびに文化財図書刊行会編『愛知県の方言』(平成元年)が刊行されるなど，常に成果を公表してきた。特に，愛知県での方言に対する態度・行動は，岐阜県における方言研究に何らかの影響を与えた可能性は否めない。特に語彙的に近似と捉えられやすい岐阜市において小さな方言集が編まれたのは，昭和47年になってからであり，また，昭和末期の「方言緊急調査」の結果も刊行されずじまいであった。このような仕事が，未来の県民に対する財産であることを考えると残念と言わなければならない状況に，岐阜県方言は置かれてきた。

平成に入ってからは，まだ時代として語れるほどの年月が離れていないため，本考察では触れなかった。これからは，より一層方言の復権を目指し，方言研究を，教育という流れの中にきちんと取り込み，特別な研究者だけでなく，一人ひとりの県民のものとして取り戻すための方策が求められている。

【付記】

本稿は，竹田晃子さん（国立国語研究所非常勤研究員）から，大正期の国語調査会による口語法調査に関し，本県の情報を問い合わせられたことに着想を得て執筆を始めたものである。稿自体は単独で成したものであるが，竹田さんからは途中助言もいただきそれを取り入れた箇所もある。記して感謝申し上げたい。ただし，本稿の不備は著者自身によるものである。

【参考文献】（本文中に引用した方言資料は除く）

真田信治(1991)『標準語はいかに成立したか』創拓社

外間守善(1971)『沖縄の言語史』法政大学出版局

山田敏弘(2006)『ぎふ・ことばの研究ノート　第5集　東濃方言資料に見られる文法項目』私家版